

クリスマスと子ども

中村 妙子

わたしには四歳と二歳の孫がいます。母親がつとめていきますので、昼間は保育園で預かっていただいております。去年のクリスマスのことです。

招かれたわたしと祖父母も一緒にケーキを食べ、両親から、祖父母からとプレゼントが渡されました。幼い子どもたちはもちろん夢中で包みを開けて喜びました。

わたしが子育てをしたころには、わたしの家の一郭には幸せなことに数軒の友人知人が寄り住ん



でいて、毎年クリスマスがきますと食事をともにし、子どもたちが寝静まってから、あっちの家、こっちの家へとサンタクロースがあちこちして、手製のものなどのプレゼントが手早く配達され、それぞれの子どもたちの枕もとにそっと置かれました。カードがついていて贈り主がわかるものも、わからないものもありました。両親からのものはたいていサンタクロースからということになっていたと思います。平生は誕生日のほかはあ

まり凝った贈物をもらったことのない子どもたちの喜びはひとしおで、とくにサンタさんからのものは特別の輝きをもっているようでした。

さてそんな思い出もあったので、そのクリスマス・イブ、わたしは孫たちの枕もとにサンタクロスからのプレゼントを置きました。ケーキの後でもらったプレゼントにくらべてずっとささやかな品物だったのに、翌朝の子どもたちの喜びよりは、前日のそれをはるかに上回るものでした。三百円そこそこのミニカーやガーゼのハンカチーフを「サンタさんがくれたの」といって一日持ち歩いていました。

わたしは少なからず考えさせられました。サンタクロースのイメージは、子どもにとってなんともいえない魅力にあふれているに違いありません。

十年くらい前のこと、クリスマスの物語集を編んだことがあります。クリスマスにちなむ欧米の

子どものための物語を読むうちに、この季節のために記された物語に共通するいくつかのことに気づきました。

その一つはいうまでもないことから、親の子どもにたいする愛情です。過去の親たちも子どもにたいして期待をかけ、ある親は自分が願っているがら与えられなかったものを与えたいと思い、またある親は自分自身の親がしてくれたように、自分の子どもにせいっぱいこの日を楽しく過ごさせてやりたいと心をくぐりました。そうした愛情が貧富の差などというものに関わりなく、いえ、むしろ貧しい家庭であればあるほど、こまやかな心づかいとなって表れている、そんな物語が圧倒的に多いのです。

もう一つは、目に見えないものにたいする畏敬の思いです。毎日の実的な心労のうちに埋もれて、平生忘れられがちな貴重な伝統を、この季節にもう一度掘り起こしたい——そんな気持ちが多

くの物語のうちに表れているように思いました。

この機会に、そうした物語を二、三取り上げてみたいと思います。

まず、いまでは日本でもかなりひろく知られている「サンタクロースっているんでしょうか？」という話。いまから百年近く前、ヴァージニアという八歳の女の子がニューヨークの新聞社あてに手紙を書きました。自分の友だちにサンタクロースなんていないといはる子がいるけれど、自分はぜったいにいると思う。新聞社の人なら知っているだろうとパパがいった。どうか教えてほしい。サンタクロースって、いるのかどうか。

これにたいして記者の一人が書いたのが、「ヴァージニア、お答えします。サンタクロースはたしかにいます。いないという、あなたの友だちの心には、なんでもうたがってかかるうたぐりや根性がしみこんでしまっているでしょう」と

いう言葉ではじまる社説です。書いた記者はフランス・チャーチという人で、牧師の息子でした。この社説は、書いた本人の想いを超えて広く知られるようになりました。ヴァージニアは成長して教育界に入り、晩年は体の不自由な子どもたちの学校の校長先生となったということです。幼い質問にまともに答えてくれた社説の思い出は、おそろく彼女の一生の宝だったでしょう。

「クリスマスの奇跡」という話があります。これはどういう人が書いたのか、よくわからないのですが、この物語の筆者の幼時の家庭はアメリカ開拓地にありました。クリスマスの前日、筆者のお父さんはふたりの息子を連れて近くの森に行つて、大きいのと、中くらいのと、小さいの二本のバルサムの木を伐つて帰りました。

さてそれまでのクリスマスですと、朝のうちに届いたツリーをお父さんが午後から居間に立て、

夜になってからお母さんが飾りつける習わしでした。けれどもその年は、ツリーはどこからも届かず、筆者も、弟も、心配でたまりませんでした。それで、朝のうち、森で伐って持って帰った三本の木のことはすっかり忘れていました。

夕食がすむと、両親は二人の子どもを居間に連れて行きました。部屋の片隅に土を入れた鉢が一つ置いてありました。「クリスマスはふしぎなことの起こる日なんだよ。すべての奇跡のうちで最もすばらしい奇跡、神の子が人間の世界にお生まれになったという奇跡を思い出させるためだろうね。今夜、この家でも奇跡が起こるかもしれない」お父さんがこういうと、お母さんは「奇跡が起こるように、お手伝いをするのは、わたしたちにもできるわ」といって、ひくいけれど、しっかりした声で「ああ、ベツレヘムよ」とクリスマスの賛美歌を歌いいただきました。二人の子どももつられて一緒に歌いました。

しばらくしてもう一度居間に入って行くと、さっきの鉢に小さな木が立っていました。華奢な、ほんの苗木でしたが、子どもたちはとてもびっくりして、お母さんに促されて、また部屋の外に出ました。そして前より元気な声で歌を歌いました。次に入って行ったときには、木は三十七センチほどの若木になっていました。そして三度目には、木は子どもたちの背より高くなっていました。筆者はもしかしたらもう一度という希望が、いや、きつとといううれしい期待に高まって行った次第を、深い喜びをもって回想しています。

筆者のお父さんは植物学者だったといえます。美しい、しかしときには厳しい顔も見せる自然を友として暮らすうちに両親は自分の子どもたちに、自然のうちにみなぎっている成長力にことよせて、自分たちが大切にしてきた信仰を伝えたいと思ったのではないかという気がします。

「ちいさちゃんの箱」という童話があります。

ちいさちゃんは天国でいちばんちいさな天使です。つばさを自由に操って大空を飛ぶことも知らず、ちよつと見たところ、天国に似合わない悪戯っ子のようにでした。歌を歌えば調子はずれだし、静かなお祈りのときに口笛を吹くし。でもちいさちゃんは、やがて生まれようとしている神さまのお子のお誕生日に自分もすてきなプレゼントをあげたいと考えていました。そして自分のいっとう大切な宝の箱をあげようと決めたのでした。

ちいさちゃんの箱に入っていたもの、それはある夏の日、ちいさちゃんが捕まえた美しい蝶の羽でした。それから白い、まるい石。ちいさちゃんが友だちと泥んこ遊びをした川の土手で見つけた小石でした。そして最後に箱から出てきたのは、仲よしの犬がはめていた首輪のきれっばしでした。犬が死んだときに埋めずに取っておいたもの

です。出して並べると、ちよつとも見栄えのしない、古ぼけたものばかりに思われて、ちいさちゃんはワアワア泣きだしました。でも神さまは、「この箱のなかには地球と人間のあたたかい、楽しい思い出がこもっている」とおっしゃって、ちいさちゃんのプレゼントを喜んで受けて下さったのです。

The Littlest Angel というこの物語を読んだとき、わたしはなぜか、筆者の悲しみのようなものを感じました。もしかしたら筆者自身にも悪戯っ子の息子がいて、その子を筆者は失ったのではないかと思つたのです。年ごとにめぐってくるクリスマス。楽しい、うれしいという思いばかりでなく、人間の経験のうちいい、がたい悲哀も伴っているこの日。多くの物語のうちには、確かにそうしたものを感しさせるものがまじっていました。

(翻訳家)